

## 第22回野幌自然環境モニタリング検討会議事概要

### 1. 日時

平成28年2月9日（金） 13：30～15：30

### 2. 会場

野幌森林公園自然ふれあい交流館 レクチャールーム

### 3. 出席者(敬称略)

委員：春木委員、平川委員、堀委員、村野委員、矢島委員（座長）（五十音順）

事務局等：坂田（技術普及課課長）、藤生（石狩地域森林ふれあい推進センター所長）  
ほか

### 4. 室内討議概要

#### 1) 開会・挨拶

北海道森林管理局より挨拶。

事務局より本検討会参加者の紹介。

#### 2) 討議

各項目（森林植生、菌類相、歩行性甲虫類、野生動物相）の平成27年度モニタリング調査実施結果概要について、事務局より説明。

各項目について担当の委員より補足説明をしていただいた後、質疑に入った。

#### ①補足説明

委員： 野幌原始林は本体部分と北広島側を一体的にみていかなければならない。クリについては、天然林と考えて良いと思う。

森林の再生段階について、第3段階までの記述になっているが、第3段階の後の第4とか第5というのを、もう考えておいてもいいのではないか。

現地検討会で観察したミズナラとコナラの植栽地については、時間の経過とともに天然林に近づいている。広葉樹を植えるということの意味を再認識できた。

アカエゾマツの人工林は、10年ぐらいの植栽年の差だが、余り状況が変わらない。恐らく地下水位、土壌が原因していると考えられる。

このようなモニタリングは一般市民にもわかりやすいように調査を行っていくべきである。

委員： 今回はオオルリオサムシが1個体しか記録されていない。オオルリオサムシは羽の退化したオサムシで、現在は江別、厚別周辺の孤立林からいなくなっている。石狩のこのあたりでは、唯一野幌森林公園が生き残っている場所である。昨年は1個体しか取れてないが、それだけで増減について判断できない。昨年度の結果だけではなくて、今後も個体数の増減についてモニタリン

グしていく必要がある。

全体的にかなり森林に近づいてきているのは、歩行性甲虫の群集から見てわかるが、まだ天然林と同等には至っていないというのが現状である。

委員： 菌類は、この1、2年、全体的にキノコの出が悪いことから、調査地の問題、調査の方法の問題など、考えていかなければいけない。

天然林で、安定して出ているサカズキカワラタケは処理区で全く出てきていないことから、天然林と類似してきたというようなことは言えない。段階としては、まだまだ広葉樹要素が入ってきていないと思われる。

委員： 最近目立つのは、アライグマが今年かなり多かった。アライグマの捕獲事業をやっているほうでも、今年かなり捕獲率が高かったと聞いている。

クロテンが最近顕著に確認されるようになり、2015年だけで、5件記録が上がっている。

委員： 6月と9月という差というのは、もっとたくさん調査した方がいいということか。

委員： 6月は繁殖して子育ての時期なので、行動力そのものが多いのだと思う。9月は繁殖だけではなくて、気温も下がってくるため、活動が鈍ってくるということがあるかもしれない。ユキウサギに関しては、雪が降り始める11月ぐらいに調査すると、もっとたくさん写ることが経験的にわかっている。

委員： 春やもっと早い時期、あるいは11月ぐらいに調査を追加する必要はないか。

委員： その目的に応じて、必要があれば補足的な調査をやってもいいと思う。しかし、モニタリングのやり方を変えると、後々のデータの処理が結構面倒になるので基本的には今の状況を基準として、何か必要があれば追加することでもいいと思う。

委員： 生息密度は推定できないか。

委員： 密度に関連付けるのは非常に難しい

## ②平成27年度野幌森林公園におけるモニタリング実施状況について

事務局： オオルリオサムシは今年1頭しか捕獲できなかった。グラフをみると、過去にもそれに近い年があったが、今年は特別なのか。

委員： 過去の調査は今よりもトラップ数があったので、かなりの数が捕獲されていた。このグラフは頻度なので、個体数としては今回1というのは初めてである。

事務局： 再生活動地①の「42か」では、植栽したトドマツがほとんど成長していないのが見られる。そういう周りの木を除去する等の施業はしないほうが良いのか。

委員： トドマツは、被圧と言うよりは、むしろかなり初期の段階の霜害と考えている。霜害を受けるとそこからなかなか立ち直れない個体があり、そのような個体が調査区に入っている。

事務局： 人工林のアカエゾマツの植栽地は、すぐ間伐してやったほうがいいのか

てしまうが、生物多様性の観点から言っても間伐した方が良いと思うが、施業をすることについてはどう考えたらよいか。

委員： 調査地は、列状間伐が既に終わっている場所である。そのため、次の施業が必要かの検討や列ごとに抜き切りする等が考えられる。ただ、野幌の森林全体をどうとらえるかが問題と考える。時間とともにどのように変化するかを検証するために、何箇所かそのまま置いておく場所があっても良いと思う。

事務局： 高密度のまま放置しておく、一遍に倒れてしまうことはないか。過密になっているので、少し間引いてやったほうが良いのではないかな。

委員： クローネの大きさを考えると、まだ間引かなくても良いと考えている。

委員： コバノヤマハンノキについて、実生もかなり出ているみたいだが、その辺りの様に判断されるのか。

委員： 私は、まだ実生は見えていない。しばしば見るようになったら要注意と考えていた。再生地でかき起こしさえしなければ、まだ大丈夫と考えている。

委員： ササの中にコバノヤマハンノキの稚苗が出ているということなので、相分散能力あるのかなと感じる。それは将来、対処しなければならないと思うので、良く観察しなければならないと思う。

委員： コバノヤマハンノキは非常に成長がいいようだが、どのぐらいまで伸びる木なのか。

委員： 大きいもので十数m、20m弱ぐらいまでは成長すると思う。道内では治山・砂防での樹種として利用され、かなり昔から植えられているので、もっと大きいものがあるかもしれない。

委員： 再生段階の図で、天然更新木の「侵入」とあるが、進入あるいは進出などとしてはどうか。侵入というのは本来外来の種類が入ってくることを言う。

委員： 変えるのには同感である。侵入よりも定着が良いのではないかな。

事務局： 調査方針は10年たったので見直すことになっている。その中でも明確に定義づけたいと思う。

### ③モニタリング調査10年間のとりまとめについて

委員： 字が多過ぎるので、3分の1～2分の1ぐらいに減らした方が良い。グラフの表現も工夫できる。写真も多用した方が良い。

ここの野幌を知っておられる森林官の方とか、それからよく来られている方の意見をどんどん聞いていただいて、そして最終的なものにしていくというのが良いと思う。

委員： 2番目の再生段階の基準という中で、表-1の中の下のほうに、「将来」というところがあるが、要するに自然であれば、ここに進んでいくというぐらいの話なので、「森に移り変わっていく」とか、「推移していく」とか、別の表現のほうが良いのではないかなと思う。

委員： 「100年前の原始性」が具体的に分かりにくい。目指す具体的な姿を説明できるようにしておく必要がある。

- 事務局： 方針の中では、誘導とかそういった言葉も使っているのですが、目指すのでなくて、誘導していくというような表現が良いかもしれない。
- 事務局： 再生段階というのは、モニタリングの方針書でも、1、2、3段までしか言っていないので、将来と言っているところは、あくまでも目標なので、この3段表から切り離して書く等してはどうか。
- 事務局： 目標としてまとめ直す。
- 委員： 風倒被害からの再生というタイトルも悪くないが、台風被害からの再生とした方が、風倒が台風によるものとすぐ分かるのでいいのではないかな。
- 委員： 表紙の写真でもっと良いものはないかな。
- 委員： アカエゾマツ林の写真はどうか。下層にハイイヌガヤがあったりする。
- 事務局： 写真については、相談させていただきたい。
- 委員： 図の番号はなくてもいいのではないかな。
- 事務局： 図表の番号は削除する。
- 委員： 100年前の原始性とはどのような状態を指すのか共通理解はあるのか。
- 委員： 100年前はすでに原始林ではなくなり、当時の状況を想起する林もほとんど残っていないように思われる。
- 委員： 例えば、明治開拓以前の原始性というような表現にすれば、それなりに共通イメージは描ける。
- 事務局： これは大もとの野幌プロジェクト、それが掲げる目標の中で、その100年前というようなことなので、多分100年とか、昭和何年ぐらいとかそういう意味ではなく、太古の昔を偲んだ意味である。そんなイメージで進めたと思う。
- 委員： シンボリック的な100年と考えてはどうか。
- 委員： この問題はとても難しく、結論を出せないが、漠然と100年という時間のすごさをイメージした言葉だというふうを受け取ることとしたい。
- 委員： あとはそれに近い林というのは、こんなエリアのこういう林だよというのを載っていれば良いのではないかな。
- 事務局： 自動撮影装置の撮影頻度からは、エゾシカの増加傾向は見られませんが書かれているが、撮影頻度からは増加傾向見られないかもしれないが、実際に現場では、昨年度よりもシカが増えていると実感しているので、ここの文はなくても、削れるなら入れなくてもいいのではないかな。
- 事務局： 撮影頻度からは、影響は少ないかもわかりませんが、結局は木の幹を食べるとか、そういう森林の影響が懸念されるといったことも記載してはどうか。

### ③平成28年度野幌自然環境モニタリング調査について

- 委員： いろいろな分野の方が一つのモデル地区を何カ所か作って一般市民とともに調査を行うような調査区があってもいいのではないかな。天然林だけでなく、再生活動地なんかも良いかもしれない。
- その他の生物についても調査してみてもどうか。

パンフレットだけでなく、現地で環境の特徴が観察できる施設(例えば、アクリル板を使った地質構造が分かる施設等)を作ってはどうか。

委員： 歩行性甲虫に関しては、5年目で1回リセットして調査をスクリーニングしたので、今10年間やったやつをそのまま継続してモニタリングする。

委員： 菌類は、再生活動地に関しては、10年でつかめたかなと感じている。今後については、議論中であり、方法を修正して簡易にして続けられる方向で検討している。また、調査地周辺を広く観察する必要もあると考えている。

事務局： 野生動物については引き続き同じ手法で継続する。

#### ④その他必要事項

事務局： 先週私たちの局主宰の研究発表会で、この10年の取り組みといった形で発表させていただいた。

審査員の学識者の中からは、この10年間続けてきたことは非常に意義があり、今後も続けていったほうがいいと思うし、一般向けにわかりやすく、いろいろな先生方にとっては、そのデータを活用できるような形で体制を整えていただきたいというコメントをいただいた。そういった意味で、継続はさせていただきたいと思うが、限られた予算の中ではありますけれども、必要最小限な調査といった形でやっていきたいというふうに考えております。

事務局： 12月4日に北海道博物館で、この報告会のエントリーをしていただいたということで、12月4日が変われば、また連絡いただけるのですよね。

委員： この年度も現地で検討会を実施したが、毎年続けてほしい。ほかの人の話を聞いたり見たりすると共通認識を高められるので、続けていければ良いと思う。

#### 3) 閉会

事務局より閉会の挨拶。

以上